

## 『中村 哲 医師 -信念に生きた人-』



突私は、ずっと今津小学校の校医をしています。年に1回、ほぼ10年以上にわたり6年生の授業を受け持っています。以前は、午前中の授業で、診療所を休診にして出向いていました。そのご褒美が、生徒と一緒に食べる給食でした。最近は、午後の授業で、休まずに出向けます。テーマは決まっています「医師の仕事」です。授業では、まず、生徒に聞くのです。「皆さんの知っている偉いお医者さんを教えてください」とすると、みんなが「谷口先生」と答えてくれます。「谷口

先生以外に偉いお医者さんを知りませんか？」と聞くと、ほとんど答えはないのです。

私が「野口 英世氏やノーベル賞の山中 伸弥先生を知りませんか」というと「あー、知ってる、知ってる」と言ってくれます。「今日、私の中では、野口英世氏や山中 伸弥先生よりずっと偉いと思っている先生の話をする」と言って、中村 哲先生の話をしています。

中村 哲医師は、福岡市生まれの九州男児です。九州大学医学部の出身で、専門は神経内科、ハンセン病学と熱帯医学でした。大牟田労災病院など国内で勤務したのちに、35年前に、パキスタンの僻地ペシャワールに赴任します。中村氏は、現地に診療所を建て、地域の医療を担っていき、診療所は100カ所以上にのびました。しかし、そこで一つのこと気づきました。「対症療法ではダメだ」と。

そこから、中村氏は医療を超えた活動をする決意を固めました。病気の原因となる水不足を解決するため、賛同者の支援を得て「ペシャワールの会」を立ち上げ、井戸の掘削を始めました。その数は1600本におよびました。2000年にペシャワールやアフガニスタンが大干ばつに見舞われた際「百の診療所より一本の用水路が必要」なことを痛感し、大規模な灌漑整備に取り組み始めます。米軍のアフガニスタン空爆に際しても、現地を離れることなく支援を続けました。2003年に用水路建設に着手して、2007年に13kmの第1期用水路が開通し、掘あげた用水路の総延長は25kmにおよびます。この活動は、世界からも注目をあび、2003年にアジアのノーベル賞ともいわれるマグサイサイ賞を受賞し、2018年にアフガニスタン大統領から個人表彰され、翌年に名誉市民権を得ます。またノーベル平和賞の候補といわれていました。

中村氏が一貫していることは、弱き者の側に立ち、同じ目線で見つめることです。医師でありながら、異国の現場で自ら土木作業の先頭にたち重機を操っていました。子どもたちには、「みなさんの知らないところに、こんな立派な日本の医師が活躍していて、世界中の人々から賞賛されているのですよ」といって授業を終わります。

そして「最後の質問です。みなさんの考える最も尊敬出来るお医者さんを教えてください」というと。やはり、みんなは「谷口先生」といってくれます。賢い子どもたちです。

残念ながら、2019年中村 哲医師はアフガニスタンで、銃撃を受け死亡します。中村氏の叔父は小説家の火野葦平で、代表作「花と龍」の主人公玉井金太郎は彼の祖父です。小説にも出てくる祖母マンは、彼女を主人公にした映画があるくらい、任侠気のある人でした。その祖母から、常に「弱い人は率先してかばいなさい」「職業に貴賤はない」「どんな小さな生き物の命も尊ぶべき」などと教えられて育ったそうです。

中村氏は、日本とアジアの架け橋であり、希望の星でした。本当に、惜しい人を亡くしました。心から、ご冥福をお祈り致します。